

---

## 手紙 ~ To you of dear ~

姉子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手紙 To you of dear

### 【Nコード】

N9612E

### 【作者名】

姉子

### 【あらすじ】

パソコンや携帯でのメールが主流になり、今や手紙なんてものが古臭くなってきた時代。そんな時代のいろんな手紙。持ち主の想いを、きつと手紙は優しく伝えてくれる。

## おこつてやるよ

それは突然だった。

俺は妙にテンションが高くて、両手放しで自転車をこいでいた。あまり得意ではなかったが、登下校の道で慣れていたし見通しもよかつたため何度もしていた。そんな俺に、あいつは「いい加減にしろよ」と呆れ口調で注意を促した。そんなこともお構いなしにこいでいた俺は、ふつとバランスを崩した。

そこに丁度加速したトラックが通りかかった。

後はあまり覚えていない。でもその瞬間に、「馬鹿！」と叫ばれながら物凄い勢いで突き飛ばされたことは、力の余韻が残っていて覚えていた。

気がついたらあいつは血だらけだった。

トラックを運転していたおっさんが青い顔をして駆け寄ってきて「大丈夫か？」と駆け寄ってきた。はい、と答えると倒れているあいつをちらちら見ながら電話をし始めた。少し後ろには原型を留めていない自転車と、少しかごが曲がった俺の自転車があった。誰か知らないおばさんが「今救急車来るからね」と心配そうに俺に言った。その間、俺はただいろいろな人間に取り囲まれていくあいつをボーンと見ることしかできなかった。

俺はたいしたことなかったが、一応一緒に救急車に乗って病院に向かった。救急隊員の人がいゝろんな機械をあいつに取り付けていた。それでも俺はどこか冷静でいた。

病院に着くと、早速あいつは奥へ連れて行かれた。

まるでドラマを見ているかのようだった。

一緒に手術室に行こうと思ったら、看護婦が「手当てしようね」と言って微笑んだ。そしてやりわり掴まれた腕に、電気が走ったかのような痛みを覚えた。医者に見せたら「痛くなかった？折れてるよ？」と笑いながら言われた。はあ、と答えると、医者はもう一度笑って「このまま入院ね」と言ってカルテとかいうのを書いていた。その後は、看護婦に言われるがまま着替えさせられベッドへ寝かされた。

「お友達が心配？」

せかせか準備をしながら、看護婦は俺に言った。あいつは、と聞くと「まだ手術中」と言って少し困ったように笑った。

「家の人もうちよつとしたら来るからね」

俺なんかにぺこつと頭を下げ、看護婦は出て行った。それから10分後ぐらいに、泣いているのか怒っているのかわからない母親が勢いよく病室に入ってきて、それはまあ手加減なく俺に平手打ちをした。

一応怪我人なのに。

「この馬鹿息子！」

「落ち着いてくださいお母さん」と言う看護婦を尻目に、ぎゅうつと俺を抱きしめた。骨が軋む音が聞こえた。経験したことのない激痛に意識を奪われそうになりながら、俺は母親の暖かさを嫌というほど感じた。

それから数日後、やっとあいつは集中治療室から一般病棟に移るようになった。しかし意識が戻る気配はなかった。俺はギプスをした腕のまま、あいつの病室へ向かった。ずっと行くけなかったあいつの元へ。やけに重いドアを開けると、部屋には母親らしき人がいた。あつ、と口から思わずこぼれ俺は頭を下げた。

「もしかして・・・水木君？」

俺の母親とは違って、優しくて落ち着いた声に俺は顔を上げた。

「心配して来てくれたの？ありがとう」

俺は微笑むその人に責められているかのような気になった。すみませんと言っても許されるようなことじゃなかったが、そんな言葉しか思い浮かばなかった。何度も何度も言うたびに、涙が止まることを知らないかのように流れ続けた。自分のしたことの大きさに後悔し、今更ながら痛感した。

もつと罵倒してくれれば。  
もつと蔑んでくれたら。

ほんの少しだけ楽になれたのに。

それを許さないかのように「もういいのよ」と言って、ガキみたいに泣きまくる俺をその人は抱きしめた。

それから俺は、眠るあいつの隣にあった椅子に静かに座った。本当に眠っているかのようにだった。

「あの、紙と鉛筆ありますか？」

「何か書くの？私が代わりに」

右腕を吊った俺を心配する人に、俺は軽く首を振った。

「自分で書きたいんです、お願いします」

そう言った俺に、小さな紙と鉛筆を渡してくれた。初めて左手で書いた文字は、あまりにも下手くそだった。それでも俺は、時間をかけながらも全部書ききった。

目がさめたらおぼろげにやるよ

それだけ書いて俺は手を置いた。気がついたら額に汗が滲んでいた。

「これを、目が覚めたら渡してくれませんか？」

俺の震える手を握りながら「必ず渡すわ」と言って、その人は微笑んだ。お願いします、と言って入ってきた時より探く頭を下げ俺は病室から出た。長い長い廊下を歩きながら思い出されるのは、あいつの機嫌の悪そうな顔ばかりだった。

泣きすぎて腫れた目に日差しがあたる。俺は少しだけ立ち止まり外を覗いた。木々が、風に揺らされていた。

そしてまた俺は涙が出そうになり、歩き始めた。

くさいけど・・・許す

あれはどう考えても向こうが悪い。委員会と一緒に女の子とちよつと話してたからって。やきもちはよく焼くとは思ってたけど・・・ここまで焼かれたらちよつと驚きだ。しかも一旦不機嫌になると、これがなかなか直らない。

「なあ、そろそろ機嫌直せよ」

とりあえず無視。聞こえていないかの如く無視。

一緒に帰りながらもこの沈黙はかなりきつかった。口はきかずとも、「一緒に帰ろう」と言ったら玄関で待っていてくれたから「直ったかな？」と思っていたのに。

「あれは明日の委員会のことでちよつと話してただけだつて」

必死に話し掛けるも無反応。俺はだんだん腹が立ってきた。

「なんだよ、そんなに怒なくても」

少しだけ声を強くしても、それでも無視。俺は諦めて黙っていることにした。そして、そのまま別れの挨拶も交わすことなく家に着いた。

「俺他になんかしたかなあ」

かばんを机に放り投げて、体をベッドに投げ出した。制服を着替えるのもなんだか億劫で、俺は他の原因をひたすらに考えた。しかし、俺は何一つ悪いことなんてしていない。

1日を振り返ってはみたものの、何も思い当たる節はなかった。1日が駄目なら、昨日おととも考えてみたがやっぱり何もない。俺はとりあえず起き上がった。そして、滅多に向かわない机の椅子に腰掛けた。紙とシャーペンを手にして。

「うーん・・・これでいつか？」

書き終わったところに一階から母親の「ご飯よー」という声が聞こえ、それに返事をしながら俺は部屋を後にした。

次の日、引き続き無視し続ける彼女の手に無理やり昨日書いた紙を渡した。不機嫌だった彼女は、眉間に皺を寄せたり赤くなったりしていた。

「・・・あんた馬鹿じゃないの？」

呆れているのか、なんなのか。でも久しぶりに見た彼女の笑顔は相変わらず可愛かった。

「ねっ、仲直りして？」

手を合わせ、必死に懇願した。彼女はそんな俺を見てさらに笑い始めた。最終的には腹を抱えて大笑いだ。俺は情けないというか恥ずかしいというか。

「くさいけど・・・許す」

呼吸を整え、笑いすぎて出た涙を拭いながら彼女は言った。俺はほっとして長い溜め息をついた。

「でもあんたが悪いんだからね」

「それだよ・・・俺なんかした？」

「うわっ、まだ気づかないんだ」

彼女は再び眉間に皺を寄せた。しまった、と思っても後の祭り。

「もう知らない」

「うえ、勘弁してくれよ」

そして俺は振り出しに戻った。きっと俺は一生彼女に勝てない気がした。

あーあ、俺はこの先何回彼女に「愛してる」って手紙に書くんだろう？

## 浮気すんなよ

浮気は男なら誰でもするというのが、あいつはあまりにもしすぎだった。5日に1回は女をホテルか家に連れ込んでいた。

それもいつも違う女。鉢合わせになることもしばしばだった。

情報を聞き入れるたび「あたしって本当に恋人なのか？」と考える日々だった。それでも別れられなかったのは、多分相当私が惚れ込んでいたから仕方ない。「ごめんな、もうしないから」という言葉をいちいち信じていた。

しかしそれもいつしか限界に達し、とうとう2年前の冬に別れた。クリスマスを目前にしていたが、あたしは我慢できなかった。それにクリスマスにあいつはバイトを入れていた。恋人同士の一大イベントだというのに。

「仕方ないだろ、今日バイトだった奴が葬式があるって言うんだから」

嘘に決まっているではないか。

話によると、数日前に父親の兄弟の息子の友達の祖母が死んだと言った。あんまり関係ない、というかむしろまったく関係ない。どうせ彼女にでも「明日はバイトなんか入れないで」とでも言われたんだろうに。

嘘臭い嘘に簡単にだまされやがって。それに、クリスマスは一緒になんてあたしも望んでいた。あいつはあたしより友達とバイトを選んだのだ。

「もういい、別れよ。ばいばい」

「待てよ」と言いながらも、彼は追ってはこなかった。

あまりにもあつさりした終わり方だった。つまりはあたしたちはそこまでの関係だったってこと。あいつにとってあたしはどうでもよかったんだ。そんな男にいつまでも縋り付いていたあたしが馬鹿を見ただけってこと。おかしすぎて道の真ん中で「ははっ」と笑ったら、通りすがりの人があたしを一瞥して去っていくのが何度も見えた。そしてあたしは雪がちらつき始めたとき、何の恥じらいもなく大声で泣いた。

思っていたより傷ついていることに驚きながら。

それから一年半後、私は結婚した。

号泣するあたしにハンカチを渡しながら「大丈夫？」と言ってきた彼と。よくあんな状態のあたしに話し掛けたものだ。付き合い始めてすぐ彼に聞くと、「可愛かったからかな？」と笑った。あたしはもうこの人しかないなと思った。物好きもいたものだ。

それから早くに彼の両親に紹介され、あたしも両親に紹介した。どつちの親にも彼は「結婚を前提にお付き合いしています」と言った。あたしは「律儀な人だな」と思いながら密かに喜んでいた。

半年後、あいつから結婚式の招待状が届いた。

忘れることのないあいつから。

綺麗な字だったから、きつと奥さんが書いたんだろう。あたしは日時を見てからカレンダーを見た。予定は入っていなかった。

とりあえず相談してからにしようと思い、それを机に置こうとした瞬間ある言葉が小さく隅に書かれていた。

「悪かった」と汚い字で一言。

相変わらずというか。

あたしはあの時のように「ははっ」と一人笑った。「どうした？」と彼が新聞から目を離しながら聞いてきた。「何でもない、愛してる」と言うと、「俺も」と聞こえた。驚いて彼のほうを振り向くと、ただにこにこしていた。こっちも相変わらずであたしはもう一度笑った。

あたしは彼に「友達の結婚式があるんだけど」と言うと、「行っておいでよ」言っただけで微笑み再び新聞に目を向けた。「一緒に行かない？」と言うと、「何日？」と聞かれた。

「再来週の日曜日」と言うと、彼は「いいよ」と言っただけで新聞を机の上に置いた。そして近づいてきたかと思ったら、後ろから抱きしめられた。

「暑いからやめてよ」と言うと、「いいじゃん新婚だし」と言っただけで首にキスしてきた。あたしはくるっと向きかえって、彼の口にキスした。「浮気すんなよ」と言うと、「新婚だし、まだ当分しない」と彼は言う。

「あほか」と言って、あたしはもう一度キスした。

## 突然だけど

授業中、まともに起きてはいない。何のために学校に来ているのかと問われると、きつと「さあ？」と言って首を傾げるだろう。あいつはそんな奴だ。

「であるからして・・・って、なんだお前、珍しいな」

驚きながらも、嬉しそうに教師は誰かに向かって話し掛けていた。周りの生徒からも「珍しい」とか「雨が降るぞー」とか言う言葉が聞こえてきた。後ろを振り向くと、そう、あの万年熟睡男が起きて何かを書いていた。

「俺は嬉しいぞーこんなにも教師をやっていてよかったと思った日はない」

たかが起きているだけだというのに。どれだけあいつはこの教師に苦勞をかけているのか計り知れない。しかしそれも束の間、またしてもあいつは眠りの世界へと旅立ったらしい。教師は「またか」と言っ、本当に残念そうにしたがすぐに授業を再開した。切り替えが早かったが、それでもどこか寂しげな後姿だった。

「ねえ、不動さん」

とんとんと肩を叩かれ後ろを振り向くと、1枚の紙が渡された。

「石井から」

そう言っただけで彼女はくすくすと笑った。わけがわからず私は紙に書かれている内容を読んだ。

突然だけど好きです。  
付き合ってください。

石井

バツと後ろを振り向くと、少し小さくなった彼が見えた。耳が真っ赤だった。

「どうした不動？顔が真っ赤だぞ」

そしてそれ以上に、私は顔が赤かったようだ。教師は不思議そうに私を見た。いつの間にかクラス中に知られていたのか、「先生諸事情よー」とか「すげー」などという言葉が聞こえてきた。

それでもわからない教師は、その時間中不思議そうに私やあいつを交互に見ていた。

## 突然だけど（後書き）

2年程前の作品です。ちょっと（だいぶ？）直しました。いやーたまりませんね。何これ?!というのが多かったです。なんとなく直しきれない感じもありますが、それは温かい目をお願いします。

実は手紙 To you of dear 2もありますので、そつちも修正でき次第UPします。まあとりあえず・・・これは新しくないから！中途半端じゃないな、うん！

ああ・・・もちつとがんばろう。

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9612e/>

---

手紙 ~ To you of dear ~

2010年10月28日13時58分発行